

母の 684 ひろば

doshinsha / haha no hiroba



わたしの原風景⑩／長野ヒデ子 2
 耳で聞く小さなおはなし⑦「ホンのちよっぴり」／村中李衣、石川えりこ 3
 子どもの言葉になぜ魅かれるか？—対話が生まれる関係性を／今井和子 4
 「クローバーと魔法動物」シリーズ完結に寄せて／久保陽子 6
 おさんぽ自然観察①／いしもりよしひこ 7
 イラスト／うちむらたかし

春霞のようなボクだった

内田麟太郎

ダリの絵とデルヴォーの絵は、ダリの方がずっと巧いだろう。それでも、私はなんとなくデルヴォーの絵の方が好きである。ダリの絵にはまったく隙がないけど、デルヴォーの絵はどことなく間が抜けている。その間が抜けている彼方から、なにやらがやって来る。そのなにやらはなにやらわからないけども、私をうれしくさせる。

なるほど横山大観の絵には「すごいもんだなあ」とつぶやかされるけど、どちらかといえば小川芋銭の方がいい。大観には構えがあるけど、芋銭は手ぶらで立っているような、のほほんとした空気がある。春霞かしら。

いうまでもなく宮本三郎（古いなあ）よりも、山下清の絵を見ている方がうれしい。これは美術論でもなんでもない。絵描きでない私の好みのお話である。

で、なんで自分がこうなったのかは、よくわからない。たぶん、秀才ではなかったからだろうと、思う。秀才というのは隙がなく、全科目オール5のひとにちがいない。それにくらべたら、私は年がら年中、「おまえは、いつもぼんやりしている」と父にしかられていた。春霞って、春夏秋冬、出ていたのかしら。

で、仕方がないから、野ゆき、山ゆき、海辺ゆき、つぶらな瞳の君ゆえに……。

ザリガニ釣りや、トンボ釣りに、耽溺していた。あやや。こんな私が秀才画家ダリよりも、間抜けなデルヴォーさんを好きになったのは、なんとなくうなずける。つまり、私は間抜けなデルヴォーさんに共感しているのだ。

ダリも大観も対象に肉薄する。巧い。でも、山下清や芋銭の絵は対象に肉薄するというよりも、対象（世界）に共感しているように感じられる。命の賛歌。世界は対象じゃなくて、共感すべきものだよ～ん、と。

このことを私に教えてくれたのは、海や川や山や、バッタやカエルや、滑り台になってくれた、丘の斜面だったのでないだろうか。ワクワクしていた、ボクのいのち。

（ありがとう、みんな）

世界は対象ではなく、いのちといのちの共感の場だと教えてくれたのは、遊びだった。絵本『どろんこおばけになりたいな』は、子どもとどろんこの、いのちの賛歌です。石井聖岳さんの絵も、裸になって遊んでます。

（うちだ りんたろう／絵詞作家）

耳で聞く小さなおはなし⑦

「ホンのちよっぴり」

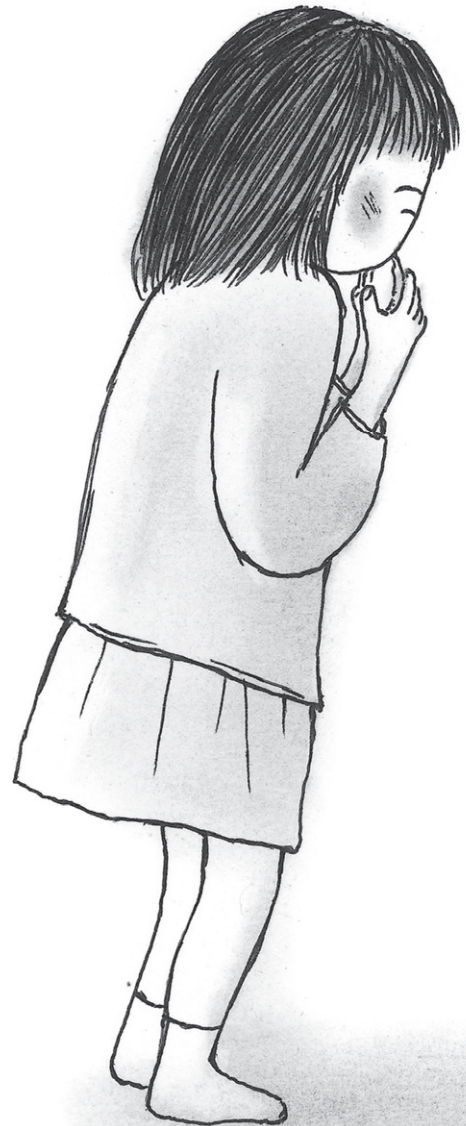
文・村中李衣 絵・石川えりこ

いまちよっぴり

小さい頃、私は母とふたり、いとこ家族の家で暮らしていた。いとこの家は和菓子屋さんで忙しかったから、おやつの間になると、いとこはお店のお饅頭なんかを勝手にとって食べてた。でも私は、「お客さん用のものは食べちゃダメ」と母に言われていたから、食べなかった。

ある日、台所のテーブルに端っこがちぎれた食パンがごっそり置かれているのを見つけた。これは食べてもいいよね、とサンドイッチみたいにバターと蜂蜜を塗り、キュウリを挟んでみた。食べてびっくり、メロンガムの味！

おいしくておいしくて、夢中で食べてたら、いとこがやってきて、「おい、それちよっぴりと食べさせる」。さっきまで、「ゲツ。きもちわる」って見向きもなかったくせに。口の中がいっぱいだったから、そのままぐもぐもしていたら、いきなり、いとこが怒り出した。



いんか。このくそケチー！

後で母にもこっぴどく叱られた。

「ちよっぴりと言われたその時になぜすく素直にハイと言えんの？」

でも、私、心の中で思った。

（どうして私が食べてからじゃダメなの？ どうしてそれじゃ、素直じゃなの？）

だから、『りんごがひとつ』を読んだ時、これだ！ と嬉しくなった。

丘の上からコロコロ転がった、なっちゃんのリんごを、動物たちがいっし

よに追いかけてくれるんだけど、ようやく捕まえたりんごの食べ方が最高。一番先にかぶりついて「あーおいし」とこっぴどくするの、やっぱりなっちゃん。後は順番に。こっぴどくなっちゃんね。



りんごがひとつ
いわむらかずお・さく

子どもの言葉になぜ魅かれるか？ — 対話が生まれる関係性を

今井和子

いまい かずこ／一九四四年静岡岡生生まれ。子どもことは研究会代表。二十三年間の保育士勤務のうち、立教女学院短期大学教授などを歴任。全国の保育者研修会で、講演などを行っている。主な著作に『0歳児から5歳児―行動の意味とその対応』（小学館）『子どもことは世界』（ミネルヴァ書房）などがある。この三月まで本誌にて「ことばのなかのこどもたち」を二年間にわたり連載した。

●はじめに

本誌での連載「ことばのなかのこどもたち」が終わりました。三十年も前の保育者時代に記録してきた子どもたちの言葉のメモ帳を紐解き、当時の子どもたちと再会できた懐かしさを感じました。けれども読者の皆様には、わずか十例あまりの言葉しか紹介出来ず、そこから子どものことばの面白さを理解していただくのは難しかったのかもしれない。

●はじめに
うからです。保育所で子ども達と生活するようになり、まず感じたことが「子どもたちが発する言葉のユニークさ」でした。常識では納得できないようなことを言っていて、笑わせたり、時には人の心に突き刺すような言葉を発したりするので、私は即、それらの言葉を書きとめてきました。まさに書くことは感動の保存でした。そのおかげで三十年も前の子どもたちとのやり取りが甦るのです。言葉を聞き、記録しておくことは写真と同じで、その子の育ちの証です。それも目に見えない「心の育ち」です。

言葉は昔から「言葉」と呼ばれ、心からあふれ出るもの即ち「心の使い」と言われてきました。人が発する音声としての言葉だけにとらわれず「その言葉を送り出した心はいかなるものであったか？」を理解することで、人との心のやりとり（対話）が成立します。そんなことを研究会などで学び、子どもたちと過ごしてきたことで学んだ「子どもの言葉の特質・その魅力」について今回は述べてみたいと思います。

- 1 まっさらな物事を見る感性の鋭さ
- みはる（四歳）
蝶々がとんでいるのを見て
「ちようちよって、仕事行かないだよね」
- いさむ（五歳）
「うちのおかあちゃんってすごいよ。目のものを言うよ。こらって！」
- たいが（六歳）
「おとなのちよっとまっさらは長いよね。」

●子どもの言葉になぜ魅かれるか？



子どものちよつとまっではすぐだけど」

幼い子どもたちの視点の新鮮さ、鋭い感受性で最も本質的なことを感じ取ってしまうように思います。さらには発想の自由さ、周りがどう思つかなどお構いなく今自分の心で感じたことが言葉になって表現されます。詩人であり教育者でもあった周郷博氏が「子どもは時に真実を手づかみにしてしまう」と講演で述べていらしたことに、全く共感でした。

2 巧みな比喻と、擬人化の表現が多い

えり(三歳)
飛行機が空に飛行機雲を残して飛んでいるのを見て

「あつ、飛行機がお空にらくがきしてる」

〔擬人化〕

みつる(四歳)

大きな石をどけたらたたくさんのダンゴムシが集まっているのを見て

「わあ、ここはダンゴムシの保育園だ」

〔擬人化〕

しゅんや(四歳)

トイレから出てきて

「先生、ぼくのうんこに骨があって、出てくるとき痛かった」〔比喻〕

子どもが喜ぶ詩の多くは、比喻表現が使われています。例えば、「タネのうた」(小野寺悦子・作)という詩の「びわのタネは鹿の目、もものタネは おさるのおしり」など……。子どもは九十九パーセント詩人である(チュコフスキー)と言われる所以です。

3 「質問」が極めて多い

幼児期には「質問期」が三回もあります。第一質問期は一歳半〜二歳頃。モノに名前があることが分かってくると「これなに? これは?」と止めどもなく質問します。第二質問期は三歳頃。「何でおかあさん怒ってるの?」など今ある状況(結果)からその原因や理由を問います。そして四歳半から五歳にかけて第三質問期です。次々に飽きることなく「それはなぜ?」「どういう意味?」「赤ちゃんはどうやって生まれたの?」「なぜ大人が困り果てるような質問を繰り返します。」

かなこ(四歳)

「お父さんとお母さん、けんかばかりしてる。なんで結婚したの?」

みずき(五歳)
「ねえ、いちばんいちばん先に生まれた人間は誰が育てたりしたの?」

「疑問を持つことは問題を発見する力」と言われていますが、この時期の子どもたちの質問は好奇心、探究心から発せられる真理探究への道を歩みだしたことを考えられます。「いい質問だね」「何でだと思っ?」と聞き返したりしながら

まずはその子が考えていることを引き出し表現する機会をつくってききました。いつも大人から答えを教えられると子どもは感じとる心が損なわれていき、自分で考えようとしなくなるからです。

以上簡単に子ども言葉の特徴と考えることを述べてみました。

●子どもと大人が対話的關係になる

さて子どもの言葉を聞き、その背後にある心、願いや悩みなどを理解すること、子どもを決して親の私物と考えるのではなく、一人の人間としてとらえていくこと

で尊重し語りあう〈対話〉が生まれてきます。

例えば「夜九時になったら寝る」という家庭のルールを守らずいつまでもゲームで遊んでいる子ども(四歳)に「もう九時を過ぎたのは知っているの?」と確かめ「うん。けどもうちょっとだから最後までしたいの」などと子どもが言ったら「それじゃあ今やっているのが終わったら寝るつもりなのね」と子どもの考えを聞き、それでお互いが納得できれば終わるのを待ちます。そして「終わったからもう寝るよ」と子どもが判断できたら「約束守れたね」と褒めてやりま

す。「いやな子ね」などと言った指示や否定語が一方的に放出されると、子どもは「不満を抱えた指示待ちっ子」になっていくことは目に見えています。子どもが人と語り合える時は「自分の思いを相手に受け止めてもらっている。理解されている。尊重してもらえた」というその人への信頼感が生じていることが何より重要だと思っています。



魔法動物の世話を通し、 読者とともに成長したクローバー

「クローバーと魔法動物」シリーズは、三月に最終巻が刊行され、完結を迎えました。今回は訳者の久保陽子さんに、シリーズの魅力をつづっていただきました。

「クローバーと魔法動物」（全三巻）の最終巻『ライバルは夏の終わりに』が刊行されました。主人公の女の子クローバーが、魔物が棲むという噂の森に初めて足を踏み入れ、魔法動物紹介所の存在を知るところから物語は始まります。そこでスタッフとして働くことになったクローバーは、妖精馬、魔法ネコ、フェニックスなど絵本でしか見たことのなかった魔法動物の世話をする事になり、目を輝かせます。世話の仕方など一つ一つ仕事を覚え、愛情を持って役目を果たしていきますが、ふさわしい里親が見つかれれば去ってしまう動物達。紹介所オーナーのシャムズさんによる「心はひろきながらも、同時に、心にかたもしておかなければいけないよ」とのセリフが、わたしたちの現実の人間関係にも通じるようで胸に沁みます。自分は運が悪く、何をやってもうまくいかないと思い込んでいたクローバーは、巻を経ることに思い込みから解放され、成長していきます。自信と勇気をもって前に進むことの大切さ。本当に大切なのは魔法ではなく、心を開いて感じること

「クローバーと魔法動物」 シリーズ完結に寄せて

久保陽子
(翻訳家)



ドキドキで、少し怖くて、おもしろかったです。私が好きな場面は、クローバーがペニーをおいかけて紹介所にこれたところです。M・Y(8歳)

1回読むと止まらなくなります。K・W(9歳)

いろいろどうぶつがいて、わたしにも好きなどぶつがいて、うれしかったです。M・O(8歳)

だという本質。他人に本音を打ち明けることで、互いから学び合い絆を育めること。魔法動物紹介所との出会いで様々な学びを得て、クローバーは変わっていきます。原書を手に取ったわたしは、読者が自分をクローバーに重ね、今後の生活を豊かにできるヒントが詰め込まれていると感じました。そして日本の子ども達にも紹介したいと思ったのです。

最終巻となりましたが、ここから先の物語は、クローバーとともに冒険を経験した読者の方々の人生の中で、紡がれていくのではないのでしょうか。物語に終わりはなく、読者の経験として組み込まれ、未来へ繋がっていくものだと考えています。

①運のわるい女の子



②魔法より大切なもの



③ライバルは夏の終わりに



クローバーと魔法動物

ケイリー・ジョージ/作

久保陽子/訳

スカイエマ/絵

定価 各1320円(本体1200円+税10%)

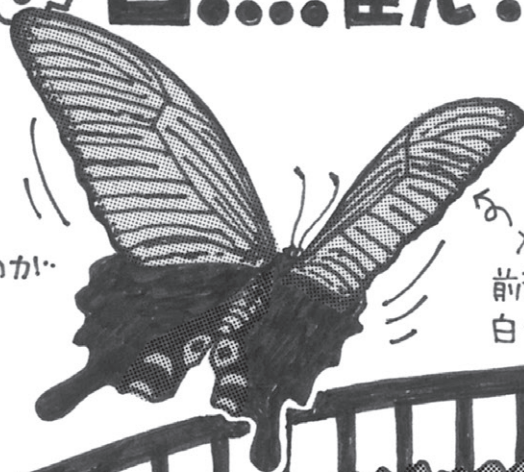
おたんぽ自然観察 ① いしもりよしひこ

近所にある
石神井川の遊歩道を

よく散歩します。

季節ごと、色々ないきものか
見られます。

千ヨウが飛んでいると
やはり目立ちます!



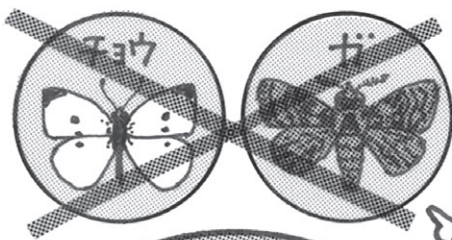
お、クロアゲハのメス!

メスは
前翅が
白っぽい

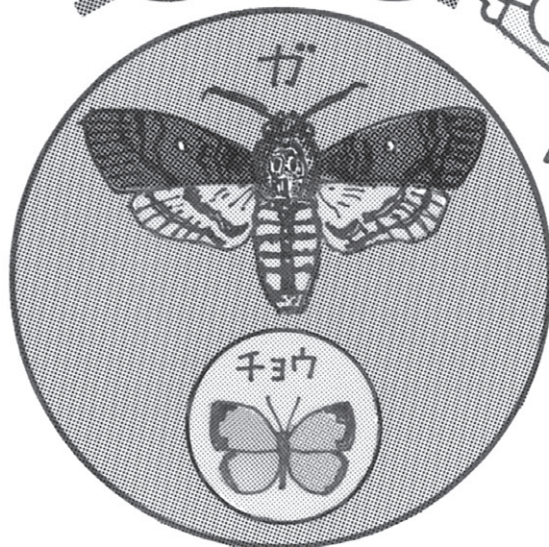


でも、木の幹に木肌そっくりな地味なガが
ひっそりととまっているのが見つかるのもうれしいもの。

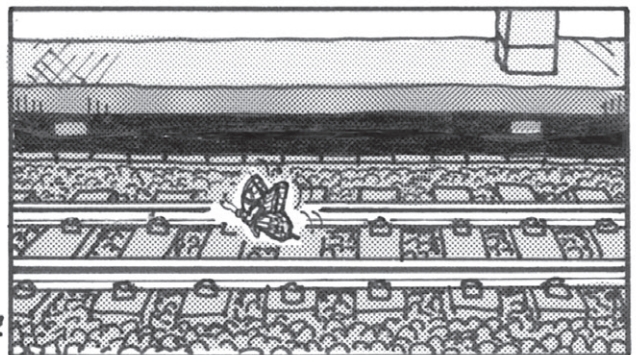
さて、そこで! 「千ヨウは好きだけれどガは嫌い!」
という声をよく聞きます。しかし…



千ヨウとガの関係は、昆虫として別々のグループなの
ではなく、「ガという大きなグループの中
の一部を千ヨウと呼ぶ」なのです。



日本の千ヨウは
約250種、
ガは
5000種以上!



ある時、駅で線路の上をアゲハ千ヨウが飛んで
いるのを見ました。鉄とコンクリートの背景の中、
「このいのちは奇跡だな!」と思いました。

いしもりよしひこ (石森愛彦) / 猫と虫と音楽が大好きなイラストレーター。著書に『うちの近所のいきものたち』『昆虫って、どんなの?』(ハッピーオウル社)、共著に『ちいさないきものずかん』シリーズ(重心社)、『かなへび』(福音館書店)などがある。

5月の新刊図書!

かたつむりの でんでんちゃん うまれたよ!

たけがみたえ/作・絵 須田研司/監修 定価1430円(本体1300円+税10%)

でんでんちゃんはうまれたばかりで小さくても、ちゃんと殻をしょっています。大きくなったら、殻のうずまきの数もふえていくよ!



かぶとむしの ぶんぶんちゃん うまれたよ!

ねもとまゆみ/作 たけがみたえ/絵 須田研司/監修 定価1430円(本体1300円+税10%)

暑い夏でもすずしい土の中で、ぶんぶんちゃんはうまれました。それからいっぱい食べて……。カブトムシが卵をうままでの物語。



単行本絵本

どろんこおばけに なりたいな

内田麟太郎/作
石井聖岳/絵

定価1430円(本体1300円+税10%)



「ずぶり ごろん ごろごろごろ」「どろんこおばけ〜」
ほくもわたしも全身をつかって、どろんこあそびをしています。そこに……。



イラスト/うちむらたかし

読者の声

童心社のおはなしえほん

こくん

村中李衣/作

石川えりこ/絵

定価1430円(本体1300円+税10%)



「こくん」と自分の気持ちをふるいたたせて、頑張るすべりだいにのぼる場面が、読者を元気づけてくれます。最後がともさわやかで、心温まる本でした。またすぐな作品を待っています。

(岡山県 Y・T)

松谷みよ子 あかちゃんの本
のせてのせて

松谷みよ子/ぶん

東光寺啓/え

定価770円(本体700円+税10%)



車が好きな息子は、車に乗ると「タクちゃんのようにどうしゃですよー、はやいですよー、プー」と自分の名前におきかえて、いつも楽しそうに口ずさんでいます。

(山口県 M・K 三五歳)

2021年5月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第684号
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話: 03(5976)4181
03(5976)4402(編集)
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン: 谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

●内田先生の巻頭言「世界は、いのちといのちの共感の場だ」とは、なんと素敵な言葉でしょう。長野ヒデ子先生の大ナマズを食べる話とも繋がってそうです。僕も小学生の頃、釣ったクチボソを川原の焚き火で焼いて食べたのがなんと美味かったのを覚えています。森や川や様々な生き物や、大勢の人たちと共感し、繋がって生きていくことが大切なんですね。①

●よしながふみ『大奥』(全19巻)を読みました。疫病により江戸の庶民の生活や政治体制が一変するその設定は、緊急事態宣言下の今読むことで一層リアリティを帯びてきます。カミュ『ペスト』やチャベック『白い病』もそうですが、文学(漫画)における思考実験は大変刺激的ですし、「飽き」が心配される自分自身の抗体づくり(?)としても最適です。②